
精霊とぼく

蒼宮 螢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊とぼく

【Nコード】

N8003H

【作者名】

蒼宮 螢

【あらすじ】

ぼくは神立一太。今日、初めて行った中学校で尋くんっていう男の子と友達になったんだ。尋くんは霊とか超能力とかに興味があるらしくて・・・。

（前書き）

何を伝えたいのか、わけがわからん、と思う方もいらっしゃるかも
しれませんが・・・。
どうぞ。

世には、超能力と精霊の力、自らの魂を駆使し、それぞれの目的のために闘う者たちがいた。

ウォーリア
彼等は戦人と呼ばれた。

精霊の詩

s h o r t s t o r y

風が吹き、木々の葉は躍るように揺れていた。そこは、ニョーステージぼくの新舞台へと続く道の景色。まだ未知に包まれた新舞台に、ニョーステージぼくは心を躍らせる。まるで隣の木のように。

季節は春。今日は入学式。見知らぬ学校に行くことに、最初はおどどしていたけれど、今は希望でいっぱいだ。一体どんな人たちに会えるんだろう？ 友達はたくさんできるかな？

「きつといいお友だちができるわ」

「うん」

お母さんの言葉に、ぼくはわくわくしながら答えた。

サイボクガクエン 塞北学園中等部

ぼくはクラス表を見てBクラスだということを知り、Bクラスの席についていた。この学校、このクラス、この席で、新しい生活が始まるんだ！ ワクワク感が止まらない。

一度、ぼくはクラスを見渡してみた。うん、そんな悪そうなヤツはいなさそうだし、結構仲良くなれそうだ。

ガラガラッ

ドアが開いた。生徒は全員席についている。ということは先生だ！

「えー、私がこのクラスを担当することになった倉石だ。一年間よろしくな」

へえー、この人が先生か。なんかちょっと怖そうだな。

「早速だが出席を取るぞ。相葉」

「はい」

「秋倉」

「あい」

「石谷」

「はい」

「宇川」

「うーす」

おお…、どんどんぼくに近づいてくるぞ。

「火神」

「はい」

「神立」

ぼくだ！！

「はい！」

あ、しまった！つい大声で…。

「おお、元気がいいな。…須澤」

「はい」

…よかったー。特にみんな、なんも思ってないみたいだ。

「…以上だ。この32人で、この一年間頑張っていこう。…この次だが、入学式があと20分ほどで始まる。10分前には廊下に出席番号順で並ぶこと。それまでは好きにやっていいぞ」

10分かー。誰か話せそうな人はいないかな。…あ、前の席の人、ひとりだ。

「ねえ、名前なんていうの」

ぼくは後ろから声を掛けてみた。でも返事はない。窓をずっと

眺めている。

「ねえ！」

「んあつ？俺か？」

はあ…、やっと振り向いてくれた。

「うん、キミ」

「火神だよ、出席で呼ばれてたろ」

…ああ、確かに。呼ばれてたかも。っていつか呼ばれてないわけないよね。

「おまえは…、神立、だったか？」

「あ、うん。よく覚えてたね」

「ん、ああ、まあ、なんとなくな」

すごいなあ…、ぼく誰も覚えてないよ。

「小学校はどこ行ってたの？」

「ショウリョウショウ照嶺小、この近く」

「あ！結構ぼくの家に近いね。ぼくこころ川コシヨウ小学校行ってたんだ」

「へえ、そうなのか」

「うん」

…。話題が尽きた。どうしよう、この気まずい空気。なんか言わなくっちゃ。

「何か、話題ないかな」

「話題？そうだな…。超能力って、信じるか？」

「超能力？スプーン曲げとか、テレパシーみたいなやつ？」

「ん、まあ、他にもいろいろ」

超能力かあ。火神くんはそういうのに興味があるのかな。うん…。

「…信じない、かな」

「そうか、だよな」

「火神くんは信じてるの？」

「んー、まあ、な」

そっかー、なんかおもしろそう。

「どういつのがあるの？」

「そりゃあいろいろだけどな、例えば^{フイール}霊視とか、^{テレポート}瞬移、^{テレパシー}伝心とかだな」

「フイール？」

「ん、ああ霊を見るってこと」

「へえー」

霊を見ることも超能力なんだ。知らなかった。超能力も結構おもしろいかも。

「じゃあ、霊とかも信じるんだね」

「ん、ああ、まあな」

へー、火神くんはこういうオカルト系なのが好きなんだ。おもしろいな。

「あ、そうだ。下の名前はなんていうの？」

「ん、ああ、^{ジン}尋だ」

「尋くんか。僕は^{イッタ}一太。よろしくね尋くん」

「ああ、よろしくな」

「おーい、廊下並べつつたろ。並べー」

先生がドアからひよっこりと顔を出して言った。

「行かなくちゃ。じゃあ、後でかな？あ、そうそう。今日一緒に帰らない？」

「ああ、別にいいけど」

「わかった！じゃあ後でね！」

ぼくは尋くんにそう言つと教室を飛び出した。

…とは言つたものの、尋くんはぼくのすぐ前なんだよね。後でじゃないし…。ま、いつか。

この北塞学園には体育館が3つある。一番大きくて古い体育館は第一体育館。柔道場や更衣室などがある、一番小さな体育館は第二体育館。そして、第一よりは少し小さいけれど、第二よりはかな

り大きい一番新しい体育館は第三者体育館。今、ぼくたちがいるのは第一体育館。もちろん入学式が行われているからだ。

「皆さんは、自立の道を歩み始めたのです。もしもその途中でわからないことがあったら、頼れる先輩たちに聞いてみてください。きっと力になってくれるはずです」

自立の道かー。そうだなー、あと五年後には大学進路も考えなくちゃいけないんだもん。そんなときだった。

「熱っ」

急に首筋のところらへんが、火傷をしたみたいに熱くなった。すぐにそこを触ってみる。特に何も無い。ヒリヒリもしない。でも、ほんの一瞬だったけれど、確かに感じた。…なんだったんだ？

入学式までで変わったことといえば、これくらいだった。

「世の万物には魂が宿る。それは理^{ことわり}であり、すべてだった」
「理^{ことわり}って？」

「ん、あー、当たり前理由みたいなもんだな」

ここは上山公園。今は午後一時。もちろん学校は結構前に終わった。家が近かったから、帰宅後もこうして遊んでるのだ。

「…」

「あれ、その続きは？」

「…忘れた。っていうか読んでない」

ああ、そういうことか。…まあ、尋くんってこんな感じの人だ。

「おまえは、なんか話題ないのか？」

いきなり？

「ぼく？んー、そうだなあ…。ヒーローものとかって、尋くん見る？」

「見ない」

即答…！

「御面ライターズとか知らない？」

「知らない」

なっ…。それじゃあ話題を続けるにも続けられないじゃないか。

「…」

「…」

どうしよう。ぼくの得意分野といたらヒーローものくらいしか…！

そのとき、光る何かが尋くんの背後にちらついた。

「えっ？」

…何かが、浮いてる？赤く、光ってる…。

「…おおっ！？」

ぼくは腰を抜かしてしまった。ぺたんと尻を地面につけてしま

「ん？どうした？」

「ひっ、ひっ、ヒトダマだぁーっ！！」

赤いヒトダマがつ！尋くんの後ろに！！

「どこにあるんだよそんなの」

尋くんは少し笑いながら辺りを見回す。

「後ろだよ！！うし、あれ？」

「牛？」

「いや、違うけど…」

…あれ？何もない。確かに、確かにあったのに！！

「人違いなんじゃないかあ？」

「どんな人と間違えるっていうんだあッ！！」

「…い、いきなり強気になったな…」

なんだったんだあれは？ホタル？いや、絶対にヒトダマだ！

「霊とかそういうの信じてるんだったらヒトダマくらい信じてよ」

「いや、霊ってというのはフツーの人には見え…」

「…どうしたの？」

「…いや、ちよつとな」

どうしたんだ？尋くん。

「まあ、とにかくフツ―の人には…、フツ―の人？」

「何自問自答してんの？」

「……。やっぱなんでもない。気にすんな」

…と言われると、逆に気になる…。

「あ、じゃあ霊が見える人はと」

「俺ちよつとトイレ行つてくる、ちよつと待つてろ」

尋くんはぼくの言葉を遮ると、急いでトイレに走っていった。

…怪しい。

トイレに行きたそうな様子は特になかったのにトイレに駆け込むなんて…。何かを隠してるに違いない！

…となれば、やっぱスパイしかないでしょ！尋くんはぼくに隠れて何をしてるのか、確かめてやる！！

そおーつと、そおーつと。

「おい」

誰？今、ぼくは忙しいんだから。

「…おい」

もう！だから誰！！

「はい、なんで…えっ」

振り向こうとしたとき、ぼくは空を飛んでいた。いや、飛んではないな。浮いていた？いや、違う。何かに吹っ飛ばされた…、そう！何かにぶっ飛ばされたんだ！！…多分蹴られて。

「…ぶはあっ！！」

地面に大激突！なにになにに！？何が起こつてんのさ！？

すぐに振り返ってみる。

…え？誰も、いない…。でもおかしい。確かに蹴っ飛ばされてぼくは宙を舞った。でも、誰もいない…？

「ん？」

何か、もやもやしたものが近づいてくる。なんだあれ？黒っぽくて、煙みたいだ。いや、煙じゃない。何か形作つてる。

…人？人の、形？もしかして…、ぼくあいつに蹴られたの！？

ち、近づいてくるってことは、また蹴られるってこと!?

「ひ、ひゃあああゝっ!」

ぼくは恐怖のあまり叫び声をあげる。まるでムンクの叫びだ。
「んな変な声出してんのはどこのどいつだ?」

…え? 赤い、炎? ま、まさか! ひ、ヒトダマが…、ぼくの目の前に!!

「んー、多分ベンチの前で倒れてる神立一太くんだな」

尋くん? 今の声は尋くん。じゃあ前に言ったのは…?

「ひっ、ヒトダ」

「マジじゃあないんだな、それが」

「尋くん!」

「よく見てみるよ」

「よく…?」

どう見ても炎にしか…。ん? 炎だけど…、中に何かが、ある?

「えっ…!?!」

炎の中に、人がいる!?

「見えたか?」

「うん、多分…」

「人、に見えたか?」

「うん…」

でもあんな小さな炎の中に人がいるなんて…。

「あれは人じゃあない」

「え?… あっ!」

「そう、霊。それも自然の力、炎を宿した精霊。俺たちはそれを炎^{エン}霊^{レイ}って呼んでる」

「炎霊…」

ホントに、霊っていたんだ…。

「それでもって、あいつの名前はフィレだ。フィレ!」

「おう!」

炎 フィレは、ぼくの前から消えると、ぼくの隣にいた尋

くんの横に現れた。

「じゃああの黒いもやもやしたのも…？」

「いや、あいつは精霊じゃない。あいつは悪霊^{ゴースト}に取り憑かれた人間、デーモンだ」

「デーモン…、鬼？」

「ん、まあ、そう呼ばれてるだけだな。あいつらはフツ―の間には見えない。精霊も同じだ」

！？
普通の人には見えない…。じゃあぼくは普通じゃないってこと

「ま、別に見えても悪いことはない。それよりか周りより得するんじゃないか？」

「あ、そんなこと言ってる場合じゃないや、尋くん…」
「ん？あ、まあ、そうだな」

尋くんは右手を前に突き出すと、その甲に黒い文字のようなものが浮かび上がった。

「ファイル！」

「待ってましたっ！！！」

「いくぞ、同化^{アフゾーブ}！！！」

ファイルは黒い模様の中に吸い込まれ、すると尋くんの手は赤々と燃えだした！

「え！？大丈夫なの！？？」

「気にすんなって」

炎は手から肩、首の方へ上っていき、右頬を伝って額まで行くと跡形もなく消えた。炎が通った場所には炎のような赤い模様が刻まれている。

「これが同化^{アフゾーブ}ってやつだ」

「アフゾーブ…」

「ソウルウェポン！」

再び尋くんの右手が燃え、尋くんは燃えている右手を左の方へ差し出した。そして右へすばやくスライドする。その跡は炎の棒の

ようになった。

「すごい…」

たまたま話しかけた人が、尋くんが、こんなことをできる人だったなんて…。

これは、運命としか思えなかった。

尋くんは炎の棒の左端を掴む。すると炎は弾け飛び、炎を模した装飾品を先端につけた赤い剣になった。尋くんはそれをデーモンに向ける。そして言った。

「チエックメイト、だな」

尋くんはデーモンに向かって駆け出し、剣は炎に包まれる。

「ハアアアツ！！」

炎の刃はデーモンを斬り裂き、男に取り憑いていた悪霊は、男を離れて消滅した。

「これが、戦士の力^{ウォーリア}ってやつだ」

尋くんは元の姿に戻ると、ぼくに笑いかける。ぼくも笑う。これから、新しい日々が始まる。そんな不思議な予感がした1日でした。

The End

（後書き）

初めまして、ホタルです！！上の名前はソウキユウと読みます、というか読ませています．．．。まだまだ未熟者で、何を伝えたいのかさっぱりわからないでしょう．．．。この小説は、“運命”といったものを伝えようと思い、書きました。元々は細かい設定も作った長編を書くつもりだったのですが、僕は長編を書くと思うと失敗するので、ここではあえて作った設定を無視して書きました！自分でも凄くうまくいった作品とは思っていないので特に宣伝するつもりはありませんが、何か御意見をいただけたら、とても嬉しいです！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8003h/>

精霊とぼく

2010年10月15日23時03分発行